

ブルターニュ公家の弔いのかたち：『ピエール2世の時祷書』を中心に

田邊, めぐみ
帝塚山学院大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/2203040>

出版情報：Stella. 37, pp.75-90, 2018-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



ブルターニュ公家の弔いのかたち^{*)}

——『ピエール2世の時祷書』を中心に——

田 邊 め ぐ み

序——問題の所在

写本の構成内容や、注文・所有主によって定義づけられた「ブルターニュ時祷書」は、百余り現存することがエバーハルト・ケーニヒによって確認されている。ただし、図像や様式の類似性からナントやレンヌにおける写本画アトリエの存在を推定した同氏が集積した写本群には、ブルターニュ地域との事実上の関わりが疑問視される作例も数多く含まれる¹⁾。そのため、美術史学的見地から「ブルターニュ時祷書」を考察すること、つまりそれらを地域との関連性から捉えることの意義は懷疑されるか、無意味と見なされてきた²⁾。

しかしながら、筆者は15世紀のブルターニュ公家とその周辺の人々が注文・所有した時祷書を彩飾する伝統的なキリスト教図像の細部に施された改変や、従来「意味なき装飾」とも見なされてきたモチーフを多元的・多角的に検討することで、「子宝祈願」や「戦勝祈願」、そして「亡者の魂に対する救済祈念」を明らかにし、各々の祈念内容から写本間の関係が浮き彫りとなる可能性を確認している³⁾。本稿の考察対象となる『ピエール2世の時祷書』(BnF. ms. lat. 1159)にかんしても、当該写本の注文主・当初所有主であるブルターニュ公ピエール2世(在位:1450-1457)自身の子宝祈願はもとより、当時のブルターニュ公家が抱えていた世継ぎ問題を図像プログラムの仔細な検討から明らかにしている⁴⁾。

いっぽう筆者が既に『マルグリット・ドルレアンの時祷書』(BnF. ms. lat. 1156B)の論考から明示しているように⁵⁾、世俗の信者が日々の祈祷に使用する時祷書には、異なる祈念が託される場合もあった。このことを踏まえれば、この写本と同じく豪華な彩飾で知られている『ピエール2世の時祷書』にも、類似した傾向が指摘出来る蓋然性が見込まれる。したがって本稿では、ピエール

2世の弟であるジル・ド・ブルターニュ（1424-1450）が非業の死を遂げていることと、後者の妻であるフランソワーズ・ド・ディナン（1436-1499）が所有していた時祷書（『カトリヌ・ド・ローアンとフランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』（BRM. mss. 34, 34bis, 34ter, 以下『フランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』と略記）に、ジルの魂の救済を希う表象が確認されることを考え合わせた上で⁶⁾、同様の祈念を公の時祷書の図像プログラムに検討してゆく。以上の考察から、一見繋がりが認められない写本間の関連を明らかにし、従来写本の個別研究が浮き彫りにしてきた極めて個人的な祈念表象が、15世紀ブルターニュの「祈りの体系」の一環をなしていること、つまり地域研究において時祷書の彩飾が担う重要な役割を明示することを目的としたい。

『ピエール2世の時祷書』に見る写本注文主・所有主の痕跡

1455年から1457年頃、ピエール2世のために制作された時祷書の注文・制作経緯や先行研究については前稿にて既に言及しているので割愛する。ただし、本論の問題の所在を明白にするため、クリスティアン・ド・メランドルによって指摘されてはいたものの⁷⁾、妥当とは見なしがたい点を確認しておきたい。メランドルの考察は、先行研究では留意されることのなかったモチーフや図像の色彩・構成を仔細に検討し、そこからブルターニュ公としてのピエール2世のあり様や、当時の公国とフランス王家との関係性を浮き彫りにした点で、非常に画期的であることに疑念を挟む余地はない。ただし、前稿で「青」と「白」の意図的な使用方法について氏とは異なる見解を提示し、当該写本をブルターニュ時祷書群のなかでのより妥当な位置づけに至っている筆者は、紋章の挿入方法にたいする同氏の解釈にも、同じく再検討の必要性を覚えている。

『ピエール2世の時祷書』には、ブルターニュ公家の紋章のみならず、フランス王家の紋章も認められる。前者はピエール2世の肖像（fols. 23r, 27v）のほか、「十字架道行」（fol. 19v）、「磔刑」（fol. 50r）、「神殿奉献」（fol. 65v）、「聖母の戴冠」（fol. 78v）、「最後の審判」（fol. 80r）、「聖モデ」（fol. 158v）、「聖アンナ三代図」（fol. 164v）「聖ドナシアンとロガシアン」（fol. 167v）、「聖ウルスラ」（fol. 168v）といった宗教図像にも伴われている。いっぽうフランス王家の紋章については、「教会暦」（fols. 9v, 10v）、「受胎告知」（fol. 32r）、「三王礼拝」（fol. 61v）、「聖アエギディウス」〔図版1〕に確認できる。

個人用の祈祷書であった時祷書に、注文主・所有主の紋章が挿入されるのは当然のことであり、その存在は写本の来歴を明示するばかりか、ときには個人的な崇敬表現の一環としての重要な役割を担うこともある。当該時祷書においても、地域との強い結びつきから篤い信仰が寄せられていた聖ドナシアンとロガシアン of 衣装や、モデ、アンナ、ウルスラといった聖人の欄外装飾にブルターニュ公家の紋章が挿入されていることに、同様の傾向は容易に認められる。他方、王族ではないピエール2世の時祷書に挿入されたフランス王家の紋章が、従来の青地ではなく赤地であることに着目したメランドルは、これを「ピエール2世のフランス王家にたいする対抗心」を示す表象の一環と結論付けている⁸⁾。フランス王家の紋章をなす青色をネガティブなモチーフに用いるいっぽうで、紋章の色彩のうちで最も優良とされる「金」と「赤」という組み合わせを意図的に使用しているというのである⁹⁾。

たしかに『ピエール2世の時祷書』が制作されたのは、イングランドからノルマンディー地方を奪還することを共に目指していたフランス王家とブルターニュ公家の協力関係が、1453年の百年戦争終結後から徐々に緊張関係へと推移する時期にあたる。とはいえ、公の対抗心に基づいてフランス王家の紋章をなす「青」が「負のモチーフ」に意図的に使用されている、というメランドルの見解が妥当ではないことは、当該時祷書における「白」の重要な意味と役割を解明した拙稿において既に確認済みである。とすれば、ここで新たに検討すべきは、「受胎告知」や「聖アエギディウス」〔図版1〕の図像に従来の王家の紋章が、いかなる改変も加えられることなく描かれている点だろう。もっとも、フランス王家が神との繋がりを誇示する表象として使用していた「受胎告知」の図像には¹⁰⁾、同じく赤地のものも確認できることから、これも公の野心表明の一環と捉えうるかもしれない。ただし、青地に金のユリを散らした模様のみが認められる「聖アエギディウス」の図像については、同様の視座から妥当な解釈を引きだすことは断じて不可能である。

ここで、欄外装飾を含むこの図像プログラムに一見不可解な要素が幾つか含まれている点に着目すべきだろう。中世末期の聖人像の典拠とされることが多かった『黄金伝説』によれば、「王の家臣が放った矢が、標的とされていた鹿のために祈っていたアエギディウスにあたり、深手を負わせた」とされる¹¹⁾。それゆえに、鹿に向かって放たれた矢は聖人の手か腕を貫いている作例が多い。

いっぽう『ピエール2世の時祷書』では、聖人のもとへ駆け寄る鹿に矢が突き刺さっているのである。また、当該時祷書の欄外装飾は、主題挿絵との関連を明瞭に示すものが多いにもかかわらず、ここには聖アエギディウスとは全く無関係に見える女性の姿が描かれている。以上の点を解明するためには、この図像を含む「とりなしの祈祷」に託されたピエール2世の意向を確認する必要があるだろう。

時祷書の基本構成要素のひとつである「とりなしの祈祷」が捧げられた聖人は、数名から数十名と各写本によって異なるが、通常「神」「三位一体」に始まり「聖母マリア」「大天使ミカエル」「洗礼者ヨハネ」「福音書記者」「使徒」「殉教者」「証聖者」「聖女」の順に並べられている。しかしながら、聖人の選択や順序、そして図像プログラムには、時祷書の注文主・所有主の意向が反映されている場合が多い。『ピエール2世の時祷書』には、通常より大幅に多い30の聖人が認められる。それらと公との関連は、ピエール2世が居を定めていたナントとの繋がりが窺える「聖モデ」や「聖ドナシアンとロガシアン」が含まれる点や、公妃であるフランソワーズ・ダンボワーズ(1427-1485)がとりわけ崇敬していた「聖ウルスラ」と「一万一千人の処女」(fol. 169v)が選択されている点などに明示されている。また、百年戦争中に制作された時祷書には、大天使ミカエルがイングランドとの戦闘風景を喚起する要素とともに描かれている場合があるが¹²⁾、『ピエール2世の時祷書』には「悪(敵)」に対する完全なる「勝者」としてのミカエルが認められるうえ〔図版2〕、同天使のお告げによって創建され、英仏海峡に面したその立地ゆえに百年戦争中の要衝となっていたモン・サン・ミシェルが「巡礼地」として表象されている。このことから、1453年に戦争が終結した後に、この時祷書が制作されたという事実ばかりか、イングランドの勢力をノルマンディー地方から一掃したピエール2世の功績さえも窺い知れる¹³⁾。

「大天使ミカエルのとりなしの祈祷」の後には、従来の順番どおり「洗礼者ヨハネへのとりなしの祈り」〔図版3〕が続くのだが、特筆すべきはその図像である。通常、同祈祷文には荒野の苦行者姿か、キリストの洗礼者としてのヨハネが描かれることが多い。プルターニュ時祷書にあつては、サロメがダンスを披露する宴や、ヨハネの斬首の図像も幾つか認められるものの¹⁴⁾、『ピエール2世の時祷書』に挿入されているのは、義理の妹ヘロディアを娶った領主ヘロデの

非行を咎めたがために投獄された洗礼者ヨハネが、宴で素晴らしい踊りを披露したサロメの褒美として斬首されることとなり、その頭首が夫妻の前に差し出されるまでの過程を異時同図法で描いた稀有な作例である¹⁵⁾。

この図像の最古の類例は『ベリー公の美しき時祷書』〔図版4〕とされている¹⁶⁾。ただし、同写本ではアミアン大聖堂が所有する洗礼者ヨハネの髑髏の額に小さな穴があったことに従い、ヘロディアは聖人の額をナイフで突いているのに反し、『ピエール2世の時祷書』の作例においてヘロディアが刃をあてているのはヨハネの首である。また、前者においてヨハネに向けられている視線が、後者ではヘロディアの方に向けられている点にも留意せざるをえない。しかしながら、図像の細部に認められるこのような相違を説明しうる理由は、伴われた祈祷文にも、写本を構成する他の要素にも見当たらない。

ブルターニュ時祷書から辿るジル・ド・ブルターニュの弔いのかたち

「ブルターニュ時祷書」には一貫した装飾様式が認められない一方、各写本に託された祈念内容から繋がりうる可能性が、筆者による彩飾の複合的な検討から徐々に明らかにされていることは既に述べた。事実、『ピエール2世の時祷書』の「洗礼者ヨハネのとりなしの祈祷」を彩飾する特異な図像は、『フランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』において、写本の所有主の夫で、ピエール2世の末弟でもあるジルが、洗礼者ヨハネに「見立て」られていたこととの関連性を喚起するのである。

ここで、15世紀半ばのブルターニュ公家を巡る騒動を確認しておきたい。百年戦争下、公国の泰平のため中立的な立場の維持に努めていたジャン5世（在位：1399-1442）の死後、公位を継承したフランソワ1世（在位：1442-1450）の治世において、ブルターニュ公国はフランス王軍を支援することとなる。このような政策に反してジルは、幼友達であるイギリス王ヘンリ6世（在位：1422-1453）との親交を絶たなかった。そうした弟ジルの態度に業を煮やしたフランソワは、1446年にジルを捕囚。その後、幾度かの審問が行われてはいたものの、1450年4月にジルは絞殺されている¹⁷⁾。

このジルと1444年に夫婦の契りを結んでいたフランソワーズ・ド・ディナンが所持していた時祷書には、様々な「受難」の表象から亡夫の非業な運命を想起させ、その魂にたいする救済祈念を促す意向が認められることは、拙稿で既

に指摘している¹⁸⁾。この考察のなかで、領主ヘロデの行いを咎めたがゆえに投獄され、その妻ヘロディアの策略に乗じて斬首された洗礼者ヨハネに、当時のブルターニュ公でジルの長兄でもあるフランソワ1世との確執ゆえに囚われの身となったうえ、看視者達の手によって不当に絞殺されることとなったジルが重ね合わされていることが明らかになっている。

フランソワとジルをそれぞれ兄と弟に持つ公が、『ピエール2世の時祷書』を注文・所有した事実からは、「洗礼者ヨハネのとりなしの祈祷」に伴われた図像にも同様の意図が託されていた可能性が窺える。じっさい、洗礼者ヨハネがジルに「見立て」られているのならば、ジルの死に直接手を下したわけではないものの、その逮捕以来、精神的・肉体的苦難を強いることを黙認しているうちに、死に至らしめることとなったフランソワ1世が¹⁹⁾、洗礼者ヨハネを疎ましく思いながらも、同聖人を信奉する民衆の蜂起を恐れるあまり、自らの手で始末しないままにあったヘロデに重ね合わせられている蓋然性は極めて高い。

たしかにこの推察に従えば、「洗礼者ヨハネ」に続いて、フランソワ1世と同名で、彼の守護聖人でもあった「聖フランチェスコ」〔図版5〕、そして同じくフランス語では「聖ジル」と称される「聖アエギディウス」〔図版1〕への「とりなしの祈祷」が配置されていることは多分に示唆的である。というのもジルの非業の死から間もなく、フランソワは謎の病で急死しているため、これらの連続した「とりなしの祈祷」をピエール2世の亡き兄弟の魂にたいする救済祈念の表象と見なしうるのである。じっさい、このような見解は各図像に伴われた欄外装飾の解釈を導くものでもある。

「洗礼者ヨハネのとりなしの祈祷」の欄外下部には、同聖人とそのアトリビュートである子羊という主題挿絵との関連性を明示するモチーフが選択されている。いっぽう、「聖フランチェスコ」と「聖アエギディウス」の主題挿絵には、それぞれ一見不可解な欄外装飾が伴われているが、それらの選択意図は未解明のままにあった。ただし上記の推察に従うならば、前者の欄外下部に描かれたフランチェスコ修道会士については、フランソワ1世の最期と密接に結びついたものであることが判明する。イングランドからアヴランシュを奪還したのち、モン・サン・ミシェルに引き上げる途上にあったフランソワ1世に、「弟ジルを殺害した罪で40日以内に命を落とすことになる」と告げたのは、捕囚されていたジルの告解を聞いたフランチェスコ修道会士であったと後代に編

まれた年代記に記されており²⁰⁾、じじつフランソワはその期間中に謎の病で急死しているのである。

こうした観点は「聖アエギディウスへのとりなしの祈祷」の欄外装飾と、ジル・ド・ブルターニュとの関連を示唆するものでもあろう。ここに認められる女性は髪を結っていないことから幼き少女であることがわかるが、膝には亡夫に忠誠を尽くすことを示す犬が認められるため、わずか8歳の時にジルと結婚の契りを交わしたものの、事実上の夫婦関係を結ぶことなく6年後には未亡人となったフランソワーズ・ド・ディナンと見なしうる²¹⁾。以上の解釈は、主題挿絵と欄外装飾との関連性を浮き彫りにするばかりか、「聖アエギディウスへのとりなしの祈祷」の図像プログラムを総体的に理解せしめるものでもある。というのも、フランソワとジルの叔父であるアルチュール3世から、この兄弟の仲裁を求められたフランス王が、一時的にはその意欲を見せていたにもかかわらず、最終的には何もせぬままジルを死に至らしめたという事実を踏まえることでようやく、ジルと同名であるがゆえにその守護聖人であるはずの聖アエギディウスが、王の従者である狩人が放った矢から鹿を護る従来の方で描かれていない理由と、この場面にフランス王家の紋章が挿入された意図とを汲み取ることが可能となるのである。

ブルターニュ公家の「吊いのかたち」が意味するもの

以上に見た一連の作意が、ピエール2世の亡き兄弟への「吊いのかたち」をなすものであるならば、「死者の聖務日課」〔図版6〕の図像プログラムにたいする既存の解釈を見直す必要があるだろう。時祷書の基本構成要素として重要な位置を占めるこの祈祷は、死後煉獄に留まっている魂の苦しみを軽減し解放を早めるために不可欠であるばかりか、自らの魂の救済のために日常的に唱えることが奨励されていたものでもある。『ピエール2世の時祷書』では「埋葬」の風景が主題挿絵として選択されており、欄外下部には転げ落ちた王冠をともなった屍と、貴人とその魂を狙う死の寓意としての骸骨が認められる。前者の屍についてケーニヒは、ピエール2世自身の姿ではないかと推察している²²⁾。たしかに自らを戒めるために、祈祷者自身の死の姿を描かせる例は、他の時祷書にも認められる²³⁾。ただし、「とりなしの祈祷」に亡き兄弟への吊いが託されていることと、「死者の聖務日課」が死後煉獄に留まっている魂を救済する

ための祈りでもあったことを勘案すれば、王冠とともに描かれた屍を、若くして急死したフランソワ前ブルターニュ公、そして「死」に脅かされている貴人の姿を、公位を継いだピエール2世自身ととらえ、権力のはかなさに対する祈祷者自身への戒めの表象と見なしうるのではあるまいか。

『ピエール2世の時祷書』に、このような公の亡き親族に対する祈念表現が託されていたのであれば、同時期に制作された公家の時祷書にも同様の意向を検討する必要性は否めない。この写本と同じく、1455年6月29日に列聖されたビンセンテ・フェレーレ (p. 318) が「とりなしの祈祷」に認められるがゆえに、制作年代をほぼ同じくすることが窺える『イザベル・スチュアートの時祷書』(BnF. ms. lat. 1369. 以下『イザベルの時祷書』と略記。)は²⁴⁾、ヨランド・ダンジュー (1412-1440) に先立たれたフランソワ1世の後妻に迎えられたイザベル・スチュアート (1427-1495 頃) が注文・所有した写本であるだけに、特に注意を要するものである。

フランソワ1世の死後、母国スコットランドでの再婚を望まれていたにもかかわらず、イザベルが生涯寡婦としてナントで夫の傍らに葬られることを選択した事実を想起するなら、当該時祷書が制作された時期には既に未亡人であった彼女が (p. 56) フランソワ (p. 38) 共々拝跪像で表象されているのは、亡夫の魂にたいする救済を祈念することを目的とした書物であるがゆえと解釈できる²⁵⁾。同様の意向は、フランソワ1世の守護聖人である聖フランチェスコに対する祈祷文 (pp. 405-408) が収められていることにも確認できる²⁶⁾。いっぽう、「聖アルマジル」(p. 314)、「聖イヴ」(p. 350)、「聖ドナシアンとロガシアン」(p. 357) といった特にナントで崇敬されていた聖人を含む「とりなしの祈祷」には、聖アエギディウスは認められず、写本全般においてもジル・ド・ブルターニュを喚起する要素は皆無である。

以上の観点から、『ピエール2世の時祷書』の「洗礼者ヨハネのとりなしの祈祷」に施された図像を改めて検討する意義は少なくない。領主ヘロデ夫妻の前に差し出された洗礼者ヨハネの頭首に妻のヘロディアがナイフを当て、夫ヘロデの視線が妻に向けられているのは、同聖人を斬首に追いやった責務は他でもなくヘロディアにあることを示している。このような図像において、妻に向けて掌を正面にかざしたヘロデの姿が多分に示唆的であることは、このしぐさが「相手の決定や命令への服従を示すもの」としたフランソワ・ガルニエによる身

ぶりの意味や象徴性の体系的な調査・研究成果に明らかである²⁷⁾。斬首された洗礼者ヨハネがジル・ド・ブルターニュに、そして領主ヘロデがフランソワ1世に「見立て」られていたのならば、ここでのヘロディアは必然的にイザベルを表すものとなる。そのことから、この図像がジルの非業な運命を想起させるものであるにとどまらず、その陰の首謀者が実はイザベルであったとピエール2世が懐疑・認識していたことの証左と見なしうるのではなかろうか。もっとも、フランソワ1世の死後もブルターニュに留まっていたイザベルが、ピエール2世に冷遇されていたことは、彼女の弟であるスコットランド王ジェームス2世（在位：1437-1460）からフランス王シャルル7世（在位：1422-1461）に宛てた書簡に示唆されているのである²⁸⁾。

結語——境界線を越える「吊いのかたち」に向けて

本稿では、1450年に相次いであの世へ旅立ったジル・ド・ブルターニュとフランソワ1世を巡るブルターニュ公家の吊いのかたちを明らかにした。異なる吊いのかたちから推察しうるピエール2世とイザベル・スチュアートの確執については、今後慎重に調査研究を重ねてゆく必要性が残されてはいるものの、両者が所持した時祷書の祈念表象の相違点は今や明白である。『イザベルの時祷書』が亡き親族の魂にたいする救済祈念に留まっているのにたいし²⁹⁾、『ピエール2世の時祷書』に託された吊いは、「繁栄」の象徴や子宝祈念の様々な表象と共存していることから、公家や公国の繁栄祈願へとつながるものであることが窺えるのである。これは、愛書家であったイザベルが所持した3冊の時祷書のうち、ブルターニュ公家の繁栄へとつながる子宝祈願の表象が散見する写本（フィッツウィリアム美術館62番）が³⁰⁾、1458年に公妃となったイザベルの長女マルグリット（1443-1469）に、そして亡き親族の魂の吊いのみが確認された『イザベルの時祷書』が、次女のマリ（1447-1506）にそれぞれ贈られた理由を把握せしめるものでもある³¹⁾。

非業の死を遂げたジルに続いてフランソワ1世が急死し、ピエール2世自身も1457年に病に侵され、その後公位を継いだ彼らの叔父アルチュール3世も老齢のためとはいえ、わずか1年後に死去し、次なるブルターニュ公フランソワ2世（在位：1458-1488）とマルグリットが1463年に漸く授かった男児にあっては、生後3か月で夭折している事実に鑑みれば、この時期に公家を担う立場

にあった者の時祷書に託された亡き親族への弔いが、公家や公国の繁栄祈願につながるものであった蓋然性は極めて高い。このような観点は、今後「弔い」や「子孫繁栄祈願」の調査研究をプルターニュ時祷書に留めず、文化圏や時代の境界を超えた考察へと繋げてゆく必要性を示唆している。たとえば、病気や不慮の事故などで未婚のままに死んだ親族の冥福を希う「冥婚」と呼ばれる死霊結婚の風習は、中国を中心に日本を含めた東アジアに認められるものである。地域や時代によって様々な様相を呈しているものの、恨みの死霊を鎮め、生者の平安を得る目的で行われる例も多数報告されている³²⁾。

この民間信仰に基づいた習俗に、花嫁人形や死者の婚礼の場面を描いた絵馬などを寺院に奉納する例が認められることを踏まえば、『ピエール2世の時祷書』の「聖アエギディウスのとりなしの祈祷」の欄外装飾に、天上の樂園と思しき果樹や草花が茂る空間に佇むフランソワーズ・ド・ディナンの姿が描かれたことのみならず、彼女が1451年に再婚した後に当該時祷書が制作されながらも、亡夫に忠誠を尽くす「幼き未亡人」として表象されている理由が、よりいっそう鮮明に立ち現れてくる。というのも、彼女がジルの伴侶となりながらも事実上の夫婦関係を結ばぬまま未亡人となった事実を想起させることは、非業の死を遂げたジル・ド・プルターニュへの弔いに寄与するからである。

亡夫の供養と妻自身の逆修を兼ねた夫婦像や、当初は単独の肖像画であったものが、描かれた人物の没後、一族の格を高める夫婦像に改変されている例などが認められる日本の肖像芸術も看過すべきではないだろう³³⁾。『イザベルの時祷書』をはじめ、時祷書には夫婦像が散見する。従来、写本の注文・所有・贈与経緯や、宗教主題や聖人に対する崇敬のありかたを問うにとどまってきた作例についても、上記の視点を踏まえて再検討をするならば、明らかになることは決して少なくないはずである。

文化圏や時代を越えた考察の危うさは承知しているが、単に「相違点」と「類似点」を列挙するに留まらず、異なる文化圏の表層をなぞるのでもなく、あらゆる「人為的」な枠組みを超越した先に見えてくるものを目指してこそ、忘れられた営為を考察する真の意義と成果が立ち現れてくるのではなかろうか。

註

- *) 本稿は、次の研究発表原稿の一部を修正・補筆したものである：『『ピエール 2 世の時祷書』に読む祈りの表象』日本フランス語フランス文学会（2012 年 10 月 20 日，於：神戸大学）；「ブルターニュ公家の時祷書から辿る生と死の図像学—ピエール 2 世の子宝祈願と弔いのかたち」関西大学東西学術研究所第 8 回研究例会（2018 年 10 月 29 日，於：関西大学児島惟謙館）。それぞれの要旨は次を参照されたい——『フランス語フランス文学研究』第 103 号，255 頁；「関西大学東西学術研究所々報」第 94 号，近刊。なお写本の主要所蔵機関については以下の略号を用いる——BnF：Bibliothèque nationale de France；BRM：Bibliothèque de Rennes Métropole。
- 1) Eberhard KÖNIG, «Un atelier d'enluminure à Nantes et l'art du temps de Fouquet», *Revue de l'Art*, 1977, n° 35, pp. 64-75；KÖNIG, «L'Enluminure à Rennes à la fin de la Guerre de Cent Ans», in Xavier BARRAL I ALTET (éd.), *Artistes, artisans et production artistique en Bretagne au Moyen Âge*, Rennes：Université de Haute-Bretagne, 1983, pp. 121-126. なお，本稿の考察対象となる『ピエール 2 世の時祷書』は，ナントで制作されたことが推察されている（voir *Arts de Bretagne：XIV^e-XX^e siècle*, Rennes：Institut culturel de Bretagne, 1990, pp. 115-116）。
 - 2) 15 世紀ブルターニュ時祷書における植物装飾の意味と象徴機能を考察した筆者の学位論文では，図像プログラムとブルターニュ地方との関連を部分的に指摘したにとどまっている。Voir Mégumi TANABE, *La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle*. Thèse de doctorat nouveau régime, Université Paris X-Nanterre, 2008, 2 vol. なお，ブルターニュ地方に由来する写本についての近年のまとまった研究成果は次を参照されたい——Jean-Luc DEUFFIC, *Notes de bibliologie：Livres d'heures et manuscrits du Moyen Âge identifiés (XIV^e-XVI^e siècles)*, Turnhout：Brepols, 2009；Diane E. BOOTON, *Manuscripts, Market and the Transition to Print in Late Medieval Brittany*, Farnham：Ashgate, 2009.
 - 3) ブルターニュ時祷書における個人的な祈念表象にかんする筆者の研究成果については次を参照されたい——«La fonction signifiante de l'ornement dans les livres d'Heures bretons du XV^e siècle», in Hélène BOUGET et Magali COUMERT (dir.), *Histoires des Breagnes 5：En marge*, Brest：Centre de Recherche Bretonne et Celtique, 2015, pp. 313-328；«L'Hermine：une devise éloquente dans les *Heures de Marguerite d'Orléans*», in Miguel METELO DE SEIXAS et Laurent HABLLOT (dir.), *La Devise. Un code emblématique européen (1350-1550)*, à paraître；『マルグリット・ドルレアンの時祷書』の余白装飾，『ステラ』第 30 号，九州大学フランス語フランス文学研究会，2011 年 12 月，87-102 頁；「祈りの文脈：『カトリクス・ド・ローアンとフランソワーズ・ド・ディナンの時祷書』」，『ステラ』第 31 号，2012 年 12 月，147-161 頁；「時祷書の語り：マルグリット・ドルレアンの子宝祈願をめぐる

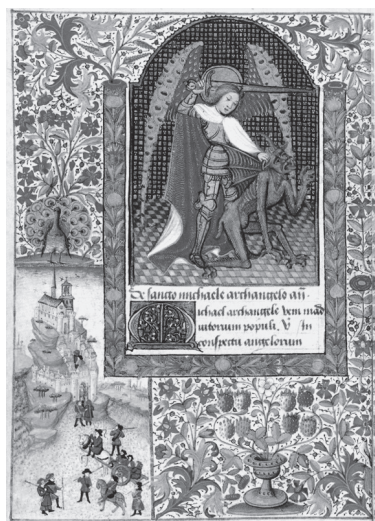
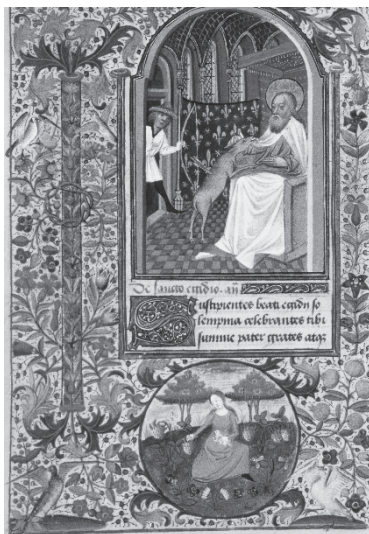
- て、『ステラ』第32号、2013年12月、137-152頁；「子宝祈願の遺産：ブルターニュ公継承問題をめぐって」、『ステラ』第33号、2014年12月、159-174頁。
- 4) 前掲拙稿「子宝祈願の遺産」。なお、当該写本のモノクロ版は BnF のウェブサイト (archivesetmanuscripts.bnf.fr/) で参照可能。
 - 5) 前掲拙稿「時祷書の語り」。当該写本は、上記 BnF のウェブサイトで参照可能。
 - 6) 当該時祷書の主要参考文献については、前掲拙稿「祈りの文脈」157頁、註3を参照。写本は BRM のウェブサイト (tablettes-rennaises.fr/) で参照可能。
 - 7) Voir Christian de MERINDOL, «Nouvelle réflexion sur le rôle de l'image dans les manuscrits XIV^e-XV^e siècle», in Gaston DUCHET-SUCHAUX (dir.), *L'Iconographie : études sur les rapports entre textes et images dans l'Occident médiéval*, Paris : Le Léopard d'or. 2001, p. 284.
 - 8) *Ibid.*, p. 282.
 - 9) 紋章における赤の重要性については次を参照されたい——ミシェル・パストウロー (蔵持不三也ほか訳)『赤の歴史文化図鑑』, 原書房, 2018, 74-79頁。
 - 10) 同様の目的でフランス王家に使用されていたキリスト教図像については次を参照——Christian de MERINDOL, «Piété et politique dans les cours royales et princières à la fin du Moyen Âge : nouvelle lectures», in *Renaissance européenne et phénomènes religieux, 1450-1650*, Montbrison : Association du Centre culturel de la Ville de Montbrison, 1991, pp. 235-263.
 - 11) ヤコブス・デ・ウォラギネ (前田敬作ほか訳)『黄金伝説』第3巻, 人文書院, 1986年, 343頁。
 - 12) 『ジャン・ド・モントーバンの時祷書』(BRM. ms. 1834. fol. 121) には、悪魔と戦う大天使ミカエルのもとで、イングランドの紋章を掲げた船に死傷した兵士が描かれている。先行研究では1430年代に制作されたと考えられているが、筆者は本書の彩飾が未完のままにあることと、写本注文主で当初所有主であるジャンから妹夫婦に贈られたことを踏まえた上で、上記の大天使ミカエルの図像プログラムと、1449年に再開したイングランドとのノルマンディーでの戦闘との関連を指摘している。写本の画像は前述の BRM のウェブサイトで参照可能。なお、当該写本の基本情報については次を参照——*Livres de Chasse et d'Histoire Naturelle : Bibliothèque Marcel Jeanson*, Neuilly-sur-Seine ; Claude Agutte, 10 octobre 2001, lot 2.
 - 13) Voir, John Plant HARTMAN, *L'Âge d'or des livres d'heures*, trad. de l'anglais par Maurice DAUBIES, Paris / Bruxelles : Elsevier-Séquoia, cop. 1977, p. 117.
 - 14) ブルターニュ時祷書における「サロメのダンス」には、次のものがある——BnF. ms. lat. 1156B, fol. 166r ; BnF. ms. lat. 18026, fol. 115r. BRM. ms. 34, fol. 72r.
 - 15) 当該図像の様々な作例と、その典拠については、次を参照されたい——井村君江『サロメの図像学』, あんず堂, 2003年。
 - 16) 聖史劇の題材とされていたこの伝説は、当時の演劇と図像の関係を確認せしめるものでもある。エミール・マール (田中仁彦ほか訳)『中世末期の図像学』(上) 国書

- 刊行会, 2000 年, 86-87 頁。いっぽう写本の注文主・所有主であるベリー公は 1407 年にアミアンに一週間滞在しているため, 洗礼者ヨハネの聖遺物そのものを知っていた可能性が推察されている。Voir Hélène GROLLEMUND et Pascal TORRES (dir.), *Les Belles Heures du duc de Berry*, Paris : Louvre éd., 2012, p. 333.
- 17) 公家の相続問題とも複雑に絡んだ百年戦争下のフランソワとジルの問題については次を参照—— Arthur de LA BORDERIE, *Histoire de Bretagne*, Rennes : Librairie générale de J. Plihon et L. Hommay, 1972, pp. 313-341. かなり簡略化されているが, 当該問題にかんする邦語文献として次も挙げられる——ジャン・ポール・エチュヴェリー (大谷暢順訳)『百年戦争とリッシュモン大元師』, 河出書房新社, 1991 年。
- 18) 前掲拙稿「祈りの文脈」, 150-155 頁。この考察では, 「ピラトの審問」(Ms. 34, fol. 11v) の欄外に描かれた書簡を手にする使者の解釈には至っていなかったが, ジルからヘンリー 6 世に宛てた手紙が途中で奪われ, イングランドとの秘契の謀叛のことで捕囚される要因となった点から説明可能であることが明らかになっている。また, 欄外下部に認められる臨終の床に横たわる病人の周囲に悪魔が配されている図像についても, 『往生術』(*Ars moriendi*) の図像との関連から捉えることにより, 主題挿絵を含めた図像プログラムの意図を一層明瞭に把握しうることも判明している。この点については, ブルターニュ公家とその周辺の者達が注文・所有した複数の時祷書との関係から稿を改めて論じる予定。
- 19) ジルの非業の死に対するフランソワ 1 世の介入の可能性については, 現在では否定されているが, 当時から長く考えられていたことは, 年代記作者の記述等に明らかである。なお, ブルターニュ公のもとで編纂された歴史書については次を参照されたい——原望『〈民族起源〉の精神史—ブルターニュとフランス近代』, 岩波書店, 2003 年, 65-72 頁。
- 20) Alain BOUCHART, *Les grandes chroniques de Bretagne*, Paris, 1514, f. 202.
- 21) ジルとフランソワーズの結婚にかんしては次を参照—— LA BORDERIE, *op. cit.*, pp. 319-321 ; L-F LA BESSIERE, «Seigneurs angevins au XV^e siècle : Gilles de Bretagne et Françoise de Dinan», *Revue de l'Anjou*, n° 44, juillet-août, 1902, pp. 103-121.
- 22) Voir *Arts de Bretagne*, *op. cit.*, pp. 115-116.
- 23) 「死者の聖務日課」の図像にかんしては次を参照—— Millard MEISS, «La Mort et l'office des morts à l'époque du Maître de Boucicaut et des Limbourg», *Revue de l'Art*, n° 1, 1968, pp. 17-25 ; Danièle ALEXANDRE-BIDON, «La Mort dans les livres d'heures», in *À réveiller les morts au quotidien dans l'Occident médiéval*, Lyon : Presses Universitaires de Lyon, 1993, pp. 83-94.
- 24) 当該時祷書の基本情報については次を参照されたい—— Victor LEROQUAIS, *Les livres d'Heures, Manuscrits de la Bibliothèque nationale*, Paris : Bibliothèque nationale, 1927, t. I, p. 185-189. なお, 当該写本は, 前述の BnF のウェブサイト

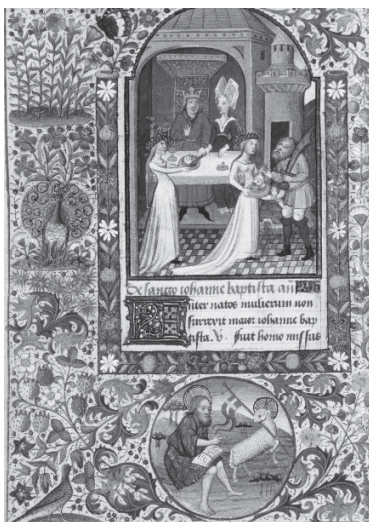
で参照可能。

- 25) この時祷書には、写本所有主イザベルとその亡夫であるフランソワの紋章に、それぞれ王冠が被せられていたり、「聖ドナシアンとロガシアン」の着衣にブルターニュ公家の紋章が施されるなど、『ピエール2世の時祷書』と同じくフランス王家に特有の図像上の作意が踏襲されている。ただし、これらは後代の写本所有主の一人であった François Roger de Gaignières (1642-1715) の加筆である可能性が非常に高い。
- 26) 当該時祷書には、聖フランチェスコに関連する図像やモチーフも認められるが、これらが単なる聖人崇敬の表象に留まっていないことは、同じくイザベルが1462年頃に注文・所持したと考えられる時祷書 (BnF, ms. n.a.l. 588) には、同様の傾向が認められないことに明らかなである。15世紀ブルターニュ時祷書における同聖人への崇敬表現については次を参照されたい——前掲拙論, *La signification et la fonction symbolique de l'ornement végétal dans les livres d'heures bretons au XV^e siècle*, t. I, pp. 270-272.
- 27) François GARNIER, *Le langage de l'image au Moyen Âge : Signification et symbolique*, Paris : Le Léopard d'or, 1982, p. 174.
- 28) Voir Margaret R. TOYNBEE, «The portraiture of Isabella Stuart, Duchess of Brittany (c.1427-after1494)», *Burlington Magazine*, vol. 88, 1946, p. 300. ただし、イザベルが夫の死後も祖国に戻らなかったこともあり、こういった境遇の真偽が定かではないことも指摘されている。
- 29) この時祷書には、後のルイ11世 (在位 : 1461-1523) に嫁いだものの、夭折したイザベルの姉のマーガレット (1424-1444) にかんするテキスト (pp. 446-450) も収められている。この姉妹については次を参照—— Priscilla BAWCUTT et Bridget HENISCH, «Scots Abroad in the Fifteenth Century : The princesses Margaret, Isabella, and Eleanor», in Elizabeth EWAN et Maureen M. MEIKLE (éd.), *Women in Scotland c.1100-c.1750*, East Linton : Tuckwell Press, 1999, pp. 45-55.
- 30) Voir Elizabeth L'ESTRANGE, «Images de maternité dans deux livres d'heures appartenant aux duchesses de Bretagne», in Anne-Marie LEGARÉ (éd.), *Livres et lectures de femmes en Europe entre Moyen Âge et Renaissance*, Turnhout : Brepols, 2007, pp. 35-47. なお、マルグリット・ド・ブルターニュの蔵書については次を参照—— Jean-Luc DEUFFIC, *op. cit.*, pp. 167-170.
- 31) Priscilla BAWCUTT et Bridget HENISCH, art. cité, p. 48.
- 32) 松崎憲造編, 『東アジアの死霊結婚』, 岩田書院, 1993年。
- 33) 中村俊春「家族・母子・家庭のイメージ読解のための序論」, 『絵画と私的世界の表象』, 京都大学出版, 2012年, 20-22頁。

図版1 聖アエギディウス



図版2 大天使ミカエル

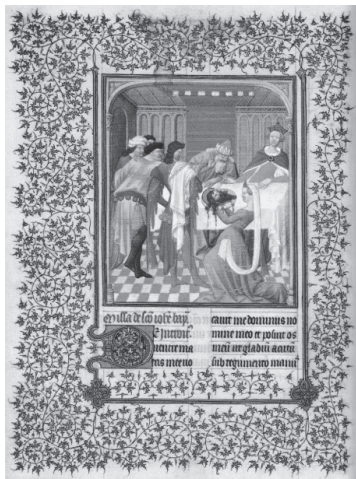


図版3 洗礼者ヨハネ

Fig. 1: *Heures de Pierre II*, Paris, BnF, ms. lat. 1159, fol. 163v.

Fig. 2: *Ibid.*, fol. 160v (Les manuscrits des rois de France au Moyen Âge, Bibliothèque de l'Image, 1997, p. 74).

Fig. 3: *Ibid.*, fol. 161v.



図版 4 ヘロデとヘロディアに洗礼者ヨハネの首を差し出すサロメ



図版 5 聖フランチェスコ



図版 6 埋葬

Fig. 4: *Les Belles Heures du duc de Berry*, New York, The Metropolitan Museum of Art, The Cloister Collection, 1954, fol. 212v (Hélène GROLLEMUND et Pascal TORRES (dir.), *Les Belles Heures du duc de Berry*, Paris : Louvre éd., 2012, p. 332).

Fig. 5: *Heures de Pierre II*, Paris, BnF, ms. lat. 1159, fol. 162v.

Fig. 6: *Ibid.*, fol. 98r.